

画像資料の応用的活用への事例的研究

山内 利秋

1. はじめに

画像資料のアーカイブ化が進んできたそもそもの背景には、失われゆく文化遺産を少なくとも電子画像情報という形態で持って記録化するという認識があるが、得てしてこのような情報集積は、情報を蓄積する事そのものが目的化してしまう問題点を少なからず持っている。

その理由として、電子化された情報が潜在的な価値を有している事は理解されていても、具体的に何を行える価値があるのか、何に活用出来る価値があるのかを正確に位置付けるのが難しいという点が挙げられよう。

このような現状においては、「活用」の具体的な取り組みをさまざまに試行して、将来的な「価値」の発見に接続していく事が必要であると考えられる。

そうした姿勢の一端として、地域社会の記憶に繋がる画像資料を具体的に活用していく方法を試行してみた。

2. 地域社会に関連する画像資料

地域社会における身近な資料として、写真に注目するのは画像資料研究の当然の帰結である。公的にも私的にも一定の数量を有し、かつ近代初頭期から連綿と続く歴史的記録であるという点で、その視覚的なドキュメンテーション力は文書以上のものがあると考えられる。だが一方で、映しこまれた被写体が一体何であるのかを解釈していく最も重要な作業が行われなくては、資料価値が半減するという事は言うまでもない。

「解釈」という作業にはさまざまな方法・プロセスがあり得るが、地域資料については専ら、自らが経験した過去の記憶を、映しこまれている被写体に対して当てはめてみる行為が繰り返される。我々はこの際、被写体が一体何であるのかを徐々に妥当な判断へと近づけていくが、そのプロセスにおいては、正答に至る間にさまざまな付帯的な情報に巡り合う事となる。

例えばある都市のどこかの「場」を過去に撮影した写真があり、この映された対象が一体何であるのかを明らかにしようとしたとする。画像の読み手が何も説明がなければ、特にこの場合は撮影された場所が一体どこであるのか・そこで何をやっているのかを確認しようとするだろう。そして具体的な分析の作業として、地域の歴史にかかわる記録である史料や映り込んでいる人工物と類似するものを探したり、インフォーマントを介した聞き取りを実施する。

最終的な「正答」を求める過程で調査者はさまざまな情報に巡り合うが、この情報は無論、必ずしも求めている答えに繋がる訳ではない。かと言ってこうした周辺の・付帯的な情報が全く意味を成さないのではなく、むしろ情報を引き出した事が呼び水となって様々な記憶が呼び起こされたり、懸案となっていた別の問題の回答がもたらされたり、さらにはインフォーマントとの会話の糸口になったり等の場面に出くわす事は、フィールドワーカーならば誰しもが経験しているだろう。

だが、そうした情報が記録として選択され、最終的に世の中に公開されるようになるには、調査者の個人的関心やその時の知識に依存されざるを得ない。過去の調査記録を後世の研究者が分析してみると、当時は注目されていなかった情報が極めて重要な価値を有していたりする事がよくある点からもこれは理解されよう。

調査の過程から経験的に認識されながらも、なおかつ実際には行われにくいのは、本来の目的からは離れた周縁的・付帯的な情報をノイズとしてカットするのではなく、その中から少しでも拾い上げて活用していく手段をいかに見出すかであろう。その場合、本来考えられていた別の角度をもって情報に光を当てる機会が必要とされるのだが、恐らく実際の記録化を担当した調査者本人よりも、やはり別の研究者によって注目される方が可能性としては高いのではないかと考えられよう。

そしてこの際に画像資料という視覚的な情報が、専門家のみならず地域社会に関連する人々の関心をも引き付け易い材料であるというのは言うまでもない。例えば地域社会に関係する写真を何らかの方法で展示（掲示）してみると、記録されている画像について情報を持っている地域住民があらわれるケースに遭遇するだろう。このように我々がたとえ意図しなくとも、映しこまれた画像の前で人は自己の記憶に関わる領域に積極的な反応を示すのだが、この特性を持って我々は何らかの目的に援用可能である事を確認していく必要がある。

3. 景観をめぐって

地域アイデンティティを景観に見出し、あるいは景観を形成するというのは「まちづくり」において広く行われる地域住民参加型の手法であって、特に伝統的な街並み保存や自然環境の保全活動において積極的に実施されている。地域の歴史を記録した写真資料は建造物の復元をはじめ、過去の人工物を再生する手がかりとして活用されているケースは極めて多い。ただ、画像そのものには場所・撮影の日付をはじめ、さまざまなメタデータが欠損している事も多く、これを補完するためには別のメディアを通じて情報を獲得しなければならない。この点において、インフォーマントからは写真に記録されていない情報を得る事が出来たり、時にはインフォーマント自身や周辺が保持している別の写真（多くはスナップ写真）がもたらされる場合もある。特に複数のインフォーマントが一枚の写真を通じて画像の内容を解釈する場合には、曖昧な記憶を互いに補ったりする事で情報の正確さを高める機会も多くなる。

そしてもう一つ着目出来るのは、一枚の写真を基に記憶を引き出すプロセスから得られる効果である。

その可能性の一つとして、ここでは回想法を取り上げる。高齢化が進行する現代においては、介護予防は医療保険費を低減させたり、家族の心身の負担を回避するために必要な措置であり、また、高齢者やその家族が余暇に費やす機会をも増やすものである。特に認知症に対して行われる心理療法の一つに回想法があるが、これは過去のよい思い出をイメージさせる事によって高齢者の発語の回数を増やしたり、心理的な安定をもたらしたりといった効果があり、家族や介護を行う人とのコミュニケーションをはかる上でも有効に機能する。近年はミュージアムや図書館を活動の場として民具資料や写真を用いた実践を行っていたり^(註1)、終末期医療施設を古い町並みやレトロな内装に再現するといった試みをミュージアム展示の専門会社とともに取り組んでいたりと、地域性の強い近代以降の資料を広く活用していく機会の広がりを伺

う事が出来る。

以上のような視点から写真資料に着目する事は、地域社会に対する関心を市民一般が高めするだけでなく、まちづくりや介護予防のような極めて具体的な案件を解決していく手法として機能するものである。

そこで今回は、上記の認識を念頭に据えながら、地域の写真を活用しての予備的なアンケートと実験を実施してみた。地域性が高く、時には個人のプライベートまでもが映しこまれた内容の解釈を撮影者やその家族・所有者・地域住民といった身近な人々が行った場合、「ここに何があったか」・「誰が映っているか」についてが最も多く話題となる事は容易に予想される。

実施した内容は一つは「地域の景観についてどのように考えているか」を設問とした記述式アンケートであり、「いい景観」・「悪い景観」とはなにか、街中にある「雰囲気のいい景観」・「面白い構築物」といったものについて回答者自身にイメージを想起させ、具体的に記述させるという方法である。

もう一つは写真を使った実験として、地図及び地域が記録された写真を活用して、写真が地図のどこを撮影したものかを参加者の記憶や推測から考えてもらうという作業を実施した。

まず、アンケート調査の対象となったのは、宮崎県内に住む成人12名・県立高等学校生徒37名の計49名である。それぞれ母数が多い訳ではなく、本調査はあくまでも予備的な調査として位置付け、本論では傾向のみ窺う事とする。

地域の景観について行ったアンケートの質問項目は次の通りである。

1：海や川、街並みや鉄塔の立ち並ぶ様子、夜景など、さまざまな眺めとして我々が見出した対象を「景観」と言いますが、この景観に関する設問に教えてください。あなたにとって「良い景観とは何か?」「悪い景観とは何か?」と言われた場合、真っ先にイメージするものはなんでしょうか?それぞれ書いてください。できればその理由も説明してください。

2：街中で「雰囲気のいい景観」をつくっている建物や面白い構築物（看板や電灯・モニュメントや、その他説明しにくいけれどもいつも見かける面白いもの）はありますか?思いついた限り教えてください。

このような設問に対する回答を確認してみる。全体的に成人と高校生とを比較してみると、成人の方がより説明的な内容で、高校生の方がイメージを一言で言い表している場合が多い。

1の設問項目の回答において見られたのは、まず「良い景観」として挙げられているものには自然景観と人為的な景観の双方が含まれているが、「悪い景観」には自然景観は含まれておらず、人為的な景観ばかりであった点である。特に自然景観を挙げたのは高等学校生徒の方が多く、「海」・「田んぼ」・「心が和む景観」のようにストレートに表現されている事例が殆どである。一方、同じ「良い景観」として自然景観を挙げた成人の場合では、次のような記述がある。

「山村地域のモザイク林相などそれを見て心が落ち着くもの・和むものだから山の中に行く

つか小さい集落があり、その中の家のえんとつから煙りがモクモクと出ている所を見て、のどかだと感じた。」

「手つかずの自然が美しい事は当然ですが、その自然に謙虚に人間の感性が入っている空間を見た時美しいと感じます。」

このように成人の場合、景観について自らの経験をもとに説明的に記述している例が多い。この事は街並み景観についての記載でも同様である。

「普段みる街並み、散歩中にボーっと見る景色なんでもきれいです。海が見える場所でも、橋通りみたいな場所もいい景色だと思います。特に今（12月）は、忙しそうだけどみんなの顔は嬉しそうなので街の中を歩く（人がいるところを歩く）のは好きです。ネコのいる風景。」
「古い街並…白壁とか雰囲気があるもの。時代を感じさせるもの。何となく上品な感じがする。」

ある特定の場について、あたかも時間軸に沿ったストーリーを展開していくような表現が成されているのが特徴的であり、そこには回答者が景観について自分の経験を含めたイメージを積み重ねている様子が窺える。これに比べると、高校生の表現は直接的であり、それは目の前に展開される像の一瞬のイメージを記述している。

このような記述の差が現れる理由が蓄積された経験と記憶によるものなのか、単純に世代間の表現力の差によるものなのかは、この程度の調査情報量からでは明らかではない。と、いうのは例外もあるからだ。例えば下記は県立高校生の記述である。

「10号線沿いの「バイパスができてしまった時にいっきにつぶれてしまったハンバーガー屋とかシャッターのしまって、サビてる店々」

「部活が終わった後校舎から見上げた夜空→東京などでは中々見られないんだな…とこの間思ったから。」

「帰りに北高の階段を下りていく途中に見る夜景（イルミネーションみたいだから）」

イメージを描き出す能力には個人差があるので、高校生であってもストーリー性を有した景観の表現が出来ない訳ではない。しかしながら、写真という固定された像から内容を解釈する行為が、単純に像そのもののイメージを読み取る段階から、像の背景にある時間的・空間的な幅を持った物語を想像する事が出来るようになる段階へと移行している可能性がある。

2の設問項目では、1と違ってより具体的な景観の説明を求めた。この設問の解答は、回答者の個人的な経験に依存する部分が多いので、高校生であっても成人であっても、ある程度説明的な記述が見られた。

県立高校生

「木花駅で降りてすぐのホームにある看板 平和台の山を登るとある展望台から見る景色」

「・（多分）焼き物屋さん…佐土原町と住吉地区の間の道路沿いにある、焼き物がいっぱい外に並べてある、古いお店。 ・佐土原町立広瀬小学校下にある駄菓子屋さん」

「県立芸術劇場の前にあるよく分からない形のモニュメント→ライトアップするふん水もある。」

「・青い外灯通り？→夜になると青い外灯が照ってる。柳丸の鮮度市場と薬屋の近くの団地。」

「道路沿いのイルミネーション 山の中にある昔のお墓とそこまでにいく造りの珍しい階段」

成人

「曾木柳瀬の街並み、八峽公民館、南久保山公民館」

「散歩中にいつも遠る（ママ）場所なのに、人の像にびびる。（ベンチに座っている人の像）」

「下北方町にある影清神社？ 小さいですが、おもしろいと思います。」

「商店街で（人が来なくなった）そのまま残っている街の飾り」

以上のような結果から予測される事は、ある程度操作的な問題を設定する事によって、回答者は長期記憶に蓄積された過去のイメージをストーリー化して説明出来る可能性があるという点である。特に高齢者の場合は、長期記憶に保存されている、特に過去の記憶を丁寧に想起させる事が出来るだろう。

4. 記憶の中の地図

地域の情報が記録された視覚的情報として、写真とともに重要な媒体として地図がある。人間が地図を読み取る行為とは、周辺環境を認識する事による現在位置の確認や、2 定点間を移動するにあたっての思考の論理的な展開であって、特に目的の場所周辺の空間になんらかの知識がある場合には、自らの記憶と照らし合わせて位置情報の再確認を行っている。

古地図、すなわち現在より過去の時点での空間的情報を視覚化した地図は、現在の地図では失われた地域社会の情報を多数記録している。すなわち古地図を読みよる行為とは、過去のイメージを蘇らせる上で重要な手段でもあるのだ。そこにさらに地図と同じ場所を記録したもう一つの視覚的イメージである写真を使って、写真に映された場所が地図上のどの時点にあたるかを判断させるという実験を行ってみた。

対象としたのは参加者A：地域で活動する建築家団体のメンバー、参加者B：N市K地区に居住する市教育委員会主催講座に参加した高齢者である。作業は昭和28（1953）年発行の、市街地中心部の当時の市内各店舗が記載された地図^(註2)と同年にN市を中心とした鳥瞰図作成のために作家によって記録撮影された写真を組み合わせたものと、昭和38年発行の同じく中心市街地周辺の住宅地図と平成17・18年に筆者が撮影した同地域のさまざまな建造物等の写真を組み合わせたものの2組を別々の机の上に置き、それぞれ写真が地図上のどこにあたるかを判別してもらった（写真）。

ここで期待したのは、写真を地図上に正確に配置するという結果ではなく、どの写真が地図上のどの場所にあたるかを検討する際にやりとりされる地域情報や写真画像には記録されていない記憶に遺された情報を引き出す事と、参加者間でのコミュニケーションそのものが促進される事である。

参加者であるAとBとの比較で目立ったのは、参加者Aの場合、写真に記録された建築物や

モニュメントといった構築物が地図のどこにあるかを正確に配置しようとし、街並みを地図上で復元しようとする傾向にあった一方、参加者Bの場合は、街並みを復元するというよりも、そこに誰がいて、何があったかという過去の思い出を他の参加者とともに語り合うという違いがみられた。

こうした点は専門家と非専門家とが情報を扱う上での違いを明確にしており、実践的な活動において専門性を持たない対象者に対して記憶を意識的に呼び起こす事を喚起する上での参考となるだろう。

5. 結論

以上のように、地域の過去を記録した画像資料の応用について実験的な方法を検討してきた。今後のデータ蓄積は当然の事ながら、今回の結果を踏まえて、より効果的な活用方法を開発していきたい。

註

- 1：愛知県北名古屋市（旧西春日井郡師勝町）にある回想法センター
- 2：東京交通社刊行の『日本商工業別明細図』を活用した。



(写真) 写真と地図を当てはめてみる。